妖狐のぽかぽか恩返し
～ロリ狐娘と山奥の庵でラブラブ共同生活～

※一部本編と異なる場合があります

●タイトルコール

お紺　「ぱちぱちぼいす」

お紺　「妖狐のぽかぽか恩返し　～ロリ狐娘と山奥の庵でラブラブ共同生活～」

●あらすじ

お紺　「山奥深くで身動きの取れなくなったところを、通りがかりの主人公に助けられた、妖狐・お紺」

お紺　「恩義に感じたお紺は、主人公に住処の庵で一夜を明かすことを勧め、昔話の傍ら、耳かきを買って出る」

お紺　「しかし、久しぶりに嗅ぐ男子の匂いに、次第に興奮を抑えられなくなってしまい……」

★トラック01：「狐の庵」

お紺　「うむ、確かにこの道で間違いない」

お紺　「この松並木を越えれば、少し開けた場所に出るでの、そこがわしの住む庵じゃ」

お紺　「……ところでぬし、そろそろ下ろしてもらっても良いじゃろうか？」

お紺　「人の目などないことは理解しておるがの、男子の背に揺られるというのは、なんとも居心地が悪いのじゃ……」

お紺　「……ふむ、わしの怪我をまだ心配しておるのか？」

お紺　「この程度、軽くひねったまでよ。そこまで心配するようなことではない」

お紺　「いいから自分に任せろ、と……むぅ、ぬしはなんとも強情じゃ！」

お紺　「ふーん、よかろう。わしはぬしよりよっぽど大人だからな。童の言うことは、聞いてやるのが年長の務めよ」

お紺　「むぅ……何を笑っておる……。わしの耳を見ても全く驚かぬし、まっこと読めぬ男よの……」

お紺　「うむ、ここじゃ、ここ。はよう中に入り、わしを背から下ろすのじゃ」

お紺　「苦しゅうない。ふむ……ぬしにはとんだ恥ずかしい姿を見せてしまったのう……」

お紺　「ところで、なにゆえぬしはこんな山奥をさまよい歩いていたのじゃ」

お紺　「ここは化けギツネが出ると、広く知られておろう？　取って食われるかなどとは、思わなかったのかの？」

お紺　「なるほど、ぬしは街の人間か。この山の伝えも、聞き及んでおらなかったのじゃな」

お紺　「……うん？　とても化けギツネなどには見えぬ、じゃと？」

お紺　「ええい、不敬な。今は信仰も畏敬も集めておらぬ故、童の姿こそしておるが……」

お紺　「これでも白毛の狐の端くれ、ぬしを取って食うなど、造作もないことなんじゃぞ？」

お紺　「……むぅ～……その顔、信じておらぬのか……」

お紺　「やれやれ……わしの姿を見て、これほどまでに動じぬ人間は初めてじゃ……」

お紺　「ともかく、礼だけは言わせてもらわねばいけぬな」

お紺　「あのまま足を挫いて立ち往生していたら、さしものわしも、風邪をひいてしまうところじゃった」

お紺　「人間に助けられたというのは気に食わぬが、恩人には変わりはない」

お紺　「礼といってはなんだが、見れば、ぬしもこの深山（みやま）に迷い、困っている様子じゃのう」

お紺　「時ももう遅い。せめてもの報恩に、この庵で一夜を明かすがよい」

お紺　「ぬしも疲れておるじゃろう？　慣れぬ山道を、わしを背負って歩いたのじゃからな」

お紺　「ほれ、横になって休むがよい」

お紺　「……うむ？　何をためらっておる？　はよう横にならんか」

お紺　「……そうじゃぞ？　この庵で横になると言ったら、この布団しかあるまい」

お紺　「ふふ、そうか。わしの隣で横になるのを、恥じておるのじゃな」

お紺　「何を恥じる必要がある？　ぬしから見たら、わしは童にしか見えぬのじゃろう？」

お紺　「そう強情を張ると、かえってぬしが童に興奮する男子……のように見えてしまうかものう、くすくす」

お紺　「ふふ、それでよい……うむ、ぬしの身体は暖かいのう♪」

お紺　「せめてもの礼じゃ。横になっている間、少し伽話（とぎばなし）でもしてやろうかの……」

★トラック２：「狐娘のモフモフ耳かき」

お紺　「ん、しょ……」

お紺　「うん、何……心配することはない。もう足は痛まん」

お紺　「なんなら、試してみるか？　ほれ、わしの足に、頭を乗っけるのじゃ」

お紺　「何を恥ずかしがることがある？　ぬしにはわしは童にしか見えぬのじゃろう？」

お紺　「くす……それとも、わしに膝枕をされたら、興奮してしまうのかの？」

お紺　「よしよし、聞き分けのいい子じゃ……」

お紺　「ふっ……」

お紺　「……くす、何をそんなに驚いておる。ほんのいたずらじゃ。ぬしは大袈裟じゃのう……」

お紺　「ぬしは耳が弱いのか……？　ふふっ、ならば伽話の間、退屈せぬよう……」

お紺　「ぬしの耳を掃除してやろうかのう……」

お紺　「くすっ、すまんすまん。わしもいたずらが過ぎた。恩人相手に、全く悪い癖じゃ」

お紺　「もっと身体の力を抜くが良い……ぬしに返礼したいと思っているのは、本当の気持ちじゃ……」

お紺　「これくらいのことしか出来ぬが……このまま、ぬしの耳を、綺麗にしてやってもいいかのう……？」

お紺　「……うむ、ぬしがそう言ってくれて、嬉しい……」

お紺　「それでは、しばしの間……耳を掃除されながら、この孤独な狐の昔語りでも、楽しんでおくれ……」

お紺　「ふふ、こうして人の耳を掃除してやることなど、いつぶりのことか……」

お紺　「わしは元々、この山に居着いた、名もない変化（へんげ）の一匹に過ぎんかった」

お紺　「それが、ふもとに人が集い、野を拓き、村が出来……」

お紺　「古くからこの地にいたわしは、いつの間にか守り神（まもりがみ）として、人の子らに崇敬（すうけい）されていったのじゃ」

お紺　「……その後、時代を経て、稲荷（いなり）としてこの庵に封ぜられた……それも、今からしたら大昔の話じゃな」

お紺　「ま、時代がどう移り変わろうと、わしが人の子らにどう見られようと、わしはわしじゃ」

お紺　「神でも変化でもなく、ただのお紺、という名の一匹の獣に過ぎんよ」

お紺　「……ふふ、どうじゃ？　昔話は、退屈かの」

お紺　「先までは威勢がよかったのに、今ではわしの膝の上で……赤子のように、まどろんでおるようじゃのう？」

お紺　「うむ、そのまま動くでないぞ。このまま、耳を……ん、ふぅ……奥の方まで、綺麗にしてやるからのう」

お紺　「んん……んっ、ふぅ、ん……んぅ……ん……ん……」

お紺　「ふふ、大分汗をかいたからのう……こちらも、垢が溜まっているようじゃ」

お紺　「人の子の耳は、掃除がしやすくてよいのう。わしなんて、自分で掃除するのも、なかなか大仕事ゆえな……」

お紺　「んふふ……どうじゃ？　なかなか気持ちがよいじゃろう？」

お紺　「童たちがよくこの庵を訪ねて来た時期があってのう、まぁ……大昔の話じゃが……」

お紺　「疲れ切った童を、今のようにあやしつけてやると、な……」

お紺　「どんな暴れん坊でも、たちまちに大人しくなったものじゃ……」

お紺　「ふふ、なんだか懐かしいのう」

お紺　「ん、しょ……んん……」

お紺　「ぬしは……その頃の童たちより、よっぽど手がかからんなぁ」

お紺　「もう、少しウトウトとしておるのではないか？　まぶたも下がり……くす、間抜けな半目面（はんめづら）になっておるなぁ」

お紺　「ほれ、眠ってしまうには、まだ早いぞ？」

お紺　「反対側も綺麗にしてやらねば、中途半端じゃからのう」

お紺　「と、その前に……」

お紺　「ふーっ、ふっ……」

お紺　「おおっと……身体を震わせおって、何事かと思ったわい」

お紺　「それはこっちの台詞、と……？　ううむ、ただ耳掃除の仕上げをしてやっただけじゃが？」

お紺　「ふふっ、なんだ、ぬし……。耳に息を吹きかけられると、ゾワゾワしてしまう、と言うんじゃな？」

お紺　「な・ら……」

お紺　「ふ――――っ……」

お紺　「……くすっ、ただ息を吹きかけているだけなのに、大げさじゃなぁ……くす、くす……」

お紺　「あはは……もっとぬしの情けない姿を見ていたいところじゃが、キリがなくなってしまうわ」

お紺　「ほれ、反対を向くのじゃ。わしはなかなかに几帳面なタチでな。最後までやり切らねば、なんだか落ち着かぬのじゃ」

お紺　「うむ、良い子じゃ……ん？　んぅ、あ、えっと……これは……」

お紺　「ふ、ふふふ……童にする時は全く気にしなかったが、流石にぬしほどの歳の男子に腹をジッと見られると……」

お紺　「んぅ……少し、こそばゆいのう……。んん……ぬしはどうじゃ……？」

お紺　「……って、もう……ぬしは、半分眠ってしまっておるようじゃの……」

お紺　「わしだけ恥ずかしがっているのが、なんだか余計に恥ずかしいわい……」

お紺　「分かった、分かった。もう片方の耳も、今に掃除してやるから……」

お紺　「うう……もう……ぬしは、眠りたかったら、眠ってしまっても良いのじゃぞ」

お紺　「むしろ、さっさと眠ってしまってくれた方が、いくらも気が楽じゃわい……」

お紺　「では、こちらも……んん……。わしの上に乗っていたせいか、妙に耳が熱いのう……」

お紺　「ふぅ……ふぅ……うううぅ……こんな、男子の火照った身体を感じていたら……くぅ、ん……いけんいけん……」

お紺　「そうじゃ、これは……ただの返礼なのじゃから……おかしなことなど、考えてはいけんぞ……」

お紺　「だが、久方ぶりにこう……男子の感触や、香りを感じていたら……わしは……うう、いけんいけん、悪い癖じゃあ……」

お紺　「あ、いやっ……なんでもないぞ？　ぬしは、このまま……ただ身を委ねておれば、いいんじゃから、なぁ……」

お紺　「ほれ、動くでない。耳掃除をしてる時に動かれたら、手元が狂ってしまうわい」

お紺　「……うむ、いい子じゃ。そのまま眠ってしまっても良いから、のう？」

お紺　「幾人もの童を寝かしつけた時のように……ぬしも、このまま心地よい眠りに、誘ってやるから、のう……」

お紺　「うむ、そのままジッとしておるのじゃ……ん……んんぅ……」

お紺　「ふぅん……んっ、しょ……んっ、ん……ふぅ、ん……んっ……」

お紺　「ふふ……本当に……気持ちよさそうにまどろんでおるわ……」

お紺　「わしもなぜか、こうしていて……とても安心してしまう……」

お紺　「随分長い間、人と語らっていなかったから……いや、それだけではないか……？」

お紺　「なぜじゃろうな、ぬしにこうして奉仕をしていると、わしは妙に心が安らぐ……」

お紺　「ぬしは神が使わせてくれた、救い人なのかも、知れぬのう……」

お紺「くす、古くは神と崇められた、わしが……そんなことを考えるのも……おかしな話じゃが……」

お紺「おっと、いかんな……今はぬしの耳掃除に、集中してやらねば……ならんから、のう……」

お紺「何はさておき……今日は立ち往生していたわしを助けてくれて、本当にありがとう、な……」

お紺「んっ、ん……ふぅぅ、ふぁ……ふぅ、んぅぅ……」

お紺「ふふっ、もう、ほとんど眠ってしまっておるようじゃな……くす……」

お紺「よいぞ、起きたころには、すっかり綺麗になっておるじゃろう……」

お紺「わしも、なんだか楽しいわい……安心して、眠りに落ちるがよい、ぞ……んん……」

お紺「んん……んっ、んっ……はぁ、んぅ……んっ、ん……」

お紺「ん……ん……ん、しょ……ん、はぁ、はぁ……んん……」

お紺「ふふっ、くす、くす……ん、ん……はぁ、ん……ん、んぅぅ……」

★トラック３：「欲情恩返し手コキ」

お紺　「ふーっ……ふーっ……、擦っただけですっかり、大きくなってしまって……」

お紺　「履物の下で、苦しそうに……ビクン、ビクンと……震えてしまっておるのう……」

お紺　「はぁ……はぁ……やはり、我慢出来ぬわい……久方ぶりに……ああ……こんなたくましい男子に、触れていたら……」

お紺　「わしも、ヘソの下が熱くなってきて……我慢なんて……もう、出来そうにない、のじゃあ……」

お紺　「ん？　気持ちいいのかの？　ふふ……まだ眠りから覚めてはいないようじゃが……」

お紺　「わしが股ぐらを擦るたびに、嬉しそうに震えておるわい……」

お紺　「ぬしも、わしを求めて……くれるんじゃなぁ……？　なら、もっと……もっとしてやっても、問題なかろうな……？」

お紺　「はぁ……はぁ……着ているものが、邪魔じゃのう……もっと触っても、構わんよな……？」

お紺　「あ……すまぬな……わしばかり、興奮してしまっておるようで……」

お紺　「わ、忘れてくれて構わぬ……わしも、久方ぶりの男子の匂いを嗅いでいて、舞い上がってしまっていたようじゃ……」

お紺　「恩人にこんなことをするなど、なんとも、浅ましい限りじゃわい……」

お紺　「む……ぬしも、目が醒めたか？　うう、すまぬのう……急に迫られたりしたら、ぬしも迷惑よな？」

お紺　「今、離れる故……先程までのことは、許してくれぬか……？」

お紺　「そんなことない、じゃと……？　むしろ、もっとして欲しい……？」

お紺　「う、うううっ……そのようなことを言われたらぁ……興奮の、収まりがつかなくなってしまうではないかぁ……」

お紺　「わしの身体……もう、芯から熱くなってしもうてぇ……」

お紺　「もう、頭の中ぁ……イチモツを嬲ったり、嬲られたり……そんなことで、いっぱいになってしまっておるぅ……」

お紺「本当に久しぶりに、男子の身体と触れ合ってしもうたからか……うう、こんな簡単に我を忘れてしまうだなんて……」

お紺「野良の猫でさえ、もう少し段階を踏んで交わるだろうに……むうっ、それもこれも、ぬしが山に入ったのが悪いのじゃっ……！」

お紺「責任は取ってもらうぞ♪　なに、ぬしももう期待しておるのじゃろう？」

お紺「ふふん、今は信仰を失って、幼子の姿をしているわしに興奮するなぞ、ぬしもなかなかの変態じゃのぉ♪」

お紺「よいぞ、互いの利益は一致しておるのじゃ……今、存分にぬしのちんぽをぉ……気持ちよくしてやろうぞ♪」

お紺「ふふ、直接触った方が、よいよな？　それでは、脱がしてやる……ううん？」

お紺「う、うーむ……最近の履物の脱がし方は、わしには分からん……一体この帯は、どうやって外すんじゃ……」

お紺「む、自分で外すにはあたらぬぞ。えっと、そのぉ……」

お紺「こういった時は、女子が外した方が……いやらしい、じゃろ♪」

お紺「じゃから、ぬしはそのまま楽にしておるがよい。今に外してやるから、の……ふぅむ……」

お紺「ここを……押して……こっちを、外して……ふむ、ふむ……」

お紺「お、これで外せたのう♪　ふふん、難解な西洋の帯とても、わしにかかればこんなものよ♪」

お紺「それじゃあ……ううむ、この留め具を外して……」

お紺「ふふ、もう少しで、ぬしのちんぽと対面じゃな♪」

お紺「プレゼントの箱を開ける子供みたい、じゃと？」

お紺「くすっ、そうなのか。でもその子供が楽しみにしているものは……ぬしのちんぽ……なんじゃ♪」

お紺「さてぇ……待たせてすまなかったの。やっと、ぬしのモノを……自由にしてやるからなぁ……」

お紺「ふぁぁ……♪」

お紺　「ぬしのちんぽ……軽く触っていた、だけなのに……もう、こんなに大きくなってしまっておる、のう……」

お紺　「立派に反り返って……もっともっとわしに触って欲しいと、ねだっているようじゃの♪」

お紺　「はぁ……はぁ……急かされなくても……わしも、この匂いを嗅いでいるだけで、もう……我慢が出来ないのじゃ……」

お紺　「もっともっと、ちんぽの匂い、嗅がせて欲しい、からぁ……」

お紺　「ふふっ、ふふふっ……指先で、扱（しご）いてしまう、からな……んん、はぁん……」

お紺　「はっ、ふっ……ん、くぅ、はぁんっ……」

お紺　「ぬしのちんぽ、もう……こんなに熱く……わしの手、握っているだけで、溶けてしまいそうじゃ……」

お紺　「はっ、はっ、はっ……それに、こんなに大きくてぇ……」

お紺　「わしの小さな手では、握り込むのも、大変なくらい……じゃぞぉ……」

お紺　「ふふっ……幼子のような小さな手で扱かれているのを見て、興奮してしまったのかの……」

お紺　「びくん、と小さく震えておったぞ……うふふ、可愛いのう……♪」

お紺　「もっとよく見ても、いいのじゃぞ？」

お紺　「本当なら、ぬしより何倍も生きている狐とは言え……」

お紺　「今のわしは、傍目からは童女（どうにょ）にしか見えまい」

お紺　「そんな小さな娘が、ほぉら……しこ、しこ……しこ、しこ、とぉ……」

お紺　「ぬしのちんぽ、扱（しご）きながらぁ……興奮して、息もまともに……はぁ……出来ないでいるのじゃあ……」

お紺　「ぬしは、こんな姿のわしに興奮してくれているのであろう？　なら、もっと見て、もっと興奮して欲しい……」

お紺　「求められることが、こんなに心地よいなんて、今まで知らんでおったからぁ……」

お紺　「もっともっと、ぬしに……淫らな視線でもよい……ぬしに、もっと求めて欲しいのじゃ……♪」

お紺　「んん……あまり強く扱いておると、スレてしまいそうじゃの……」

お紺　「はぁ、ん……ふぅぅ……なら、少し滑りを……よくしてやろうかの……」

お紺　「ん、えう……れるぅ……えううう……」

お紺　「んふ、どうじゃ？　ちんぽによだれを垂らしたら、痛くはなかろう？」

お紺　「これなら、もっと、もっと……早く、してもよいよな……はぁ、はぁ……」

お紺　「はぁ、っはぁ……ん、んぅ……くぅ、んっ……はぁ、はぁん……ふぅ、ふぅぅ……ん、はぁ……くぅぅ、んっ、ああん……」

お紺　「あはぁ……ぬしの汁と、わしの唾液が混ざり合って、なんとも濃厚な匂いになっておる……」

お紺　「はぁ……これ、あああ……癖になって、しまいそうじゃ……もっともっと、このいやらしい香りを、嗅いでいたいのじゃ……」

お紺　「んふっ……あーんぅ、えう、ん、えううう……んじゅる、じゅっ……」

お紺「ん……ぷぁ、はぁ……んふっ、ぬしのちんぽ、とってもいやらしく、飾り付けられてしまった、のう♪」

お紺「透明な、我慢汁とぉ……わしの、泡立った唾液が、ぐぢゅぐぢゅ混ざり合ってぇ……」

お紺「まるで、まんこから抜いたばっかりのように、白く汚れてしまっておるぅ……はぁぁ……」

お紺「匂い、も……わしらのものが、一緒になって……嗅いでいるだけで、頭が……痺れて、しまいそうなくらい、じゃあ……はぁぁんっ……♪」

お紺「ふぅ……ふぅぅ……もっと、もっとぬしの匂い……はぁぁ……味わいたいのじゃ……いいじゃろ……くぅん……」

お紺「んちゅ、んっ……ふぅ……んんぅ……」

お紺「うふ……口づけ、してしもうた……しかも、唇ではなしに、耳、なんぞに……」

お紺「なんだか、普通の口づけより、よほどいやらしい、感じがするわい……はぁ、んちゅう……」

お紺「んふ……こうして、いると……わしの手の中で、ぬしのちんぽが、びくん、びくんと……跳ねておるわい……くすくす」

お紺「ではぁ……こうして、耳への口づけとぉ……ちんぽシコシコ……一緒にしてやるからのぉ……♪」

お紺「んじゅっ、ちゅっ……んんふっ、んっ、れる、じゅちゅ……くすっ、んふぅ……じゅっ、ちゅっ……んぅぅ、れるるっ、じゅっ、ちゅっ……」

お紺「ぷぁぁ……はぁ、ん……ふぅ、ふぅん……口の中ぁ……ぬしの濃い香りで、いっぱいになってしもうたぁ……♪」

お紺「はっ、はっ……ぬしもぉ……身体をビクビクと震わせて……くす、くす……もう、出てしまうのか？」

お紺「わしのちっちゃな手のひらでぇ……しこしこ、ごしごし～ってされて、白いの……吐き出してしまうのかぁ？」

お紺「よいぞ……くすっ、思う存分、吐き出すがよい……わしの手で、昇り詰めてぇ……全部、ぜーんぶ出してしまえっ♪」

お紺「んっ、ふ……んんぅ、じゅちゅるっ……！」

お紺「んふぅっ、んっ、んちゅっ、んじゅるっ、んむっ、んんっ、んちゅっ、んんぅっ、ちゅうぅ、んちゅう、ぷぁぁっ、んっ、んんんっ！」

お紺　「んじゅるっ、じゅっ、ちゅっ、ぷぁっ、はっ、んんっ、んっ、くぅ、くぅぅんっ、出る、出るんじゃなっ！」

お紺　「イッて、イッてしまえぇ♪　わしの手で……はぁっ……しゃせー、してしまえぇっ♪」

お紺　「くふぅっ！　くぅ、んっ！　くぅぅぅぅっ！」

お紺　「はっ、はっ……くぅ、くぁぁ……出ておるぅ……びゅく、びゅくってぇ……ああんっ……本当に、すごい量、じゃあ……」

お紺　「ひあ、はっ、はっ……すごい、濃い……匂い……ああああ……嗅いでいるだけで、わしも……達してしまいそう、じゃ……くふぅんっ……」

お紺　「ふふ……えへへ……わしの着物に、ドロドロとかかってしまっておる、ぞぉ……」

お紺　「汚されてしまったのに……なんだかとても……はぁ、はぁ……興奮してしまうのじゃ……」

お紺　「わしは……そんな……淫らな、女じゃとは……思っていなかったのに……くぅぅ……」

お紺　「ぬしにけがされたことが、なんだか、とても嬉しくなってしまっておるぅ……」

お紺　「……ぬしのちんぽ……あれだけ出したのに、まだ大きいまま、じゃの……？」

お紺　「むぅ、わしがあんなに精一杯奉仕をしたというのに、なんだかこれは癪なのじゃ……」

お紺　「くす……ぬしぃ……まだ、出来るということじゃな？」

お紺　「ならぁ……今度は……わしの、口、でぇ……精を、枯れるまで搾り取ってやるから、の？」

お紺　「構わん、じゃろう？　ぬしも、まだ出し足りないものな？　よいよな？　よいよなっ？」

お紺　「うむっ、それではぁ……くすっ、ぬしのちんぽ……次は口で、奉仕してやるからのっ♪」

★トラック４：「童狐の濃厚フェラチオ」

お紺　「はぁぁ……こうして、ぬしのちんぽを目の前にすると……」

お紺　「太くて、長くて……わしの口に入るか、不安なほど大きい、のう……」

お紺　「ふふっ、ぬしも、興奮しておるか？」

お紺　「童女の姿をしたわしが……ちんぽに頬ずりしながら、うっとりしている、この状況を、のう……くす、くす……」

お紺　「どうじゃ？　この小さな小さな口の中で、ぬしのビキビキに勃起した大人ちんぽを、しゃぶろうとしておるのじゃ……」

お紺　「それを考えただけで、たまらなくなってしまうじゃろう……？」

お紺　「くす、答えなくてもよい……先から澄んだ汁がトロトロと溢れ出てきて、ぬしの興奮が伝わってくるわい……♪」

お紺　「れろ、ちゅ……」

お紺　「んんぅ……ぬしの、汁ぅ……とても、いやらしい味、じゃ……」

お紺　「んちゅっ、ちゅ、ちゅ……美味しいとは、言えない味なのに……一度舐め始めたら、癖になってしまいそうじゃ……」

お紺　「れる、れる……んん、ちゅ、ん……舐めれば、舐めるほど……溢れ出てくる……はぁ、はぁぁ……」

お紺　「わしも、これを舐めていたら……まるで、酒でも舐めているように……身体が、芯から熱くなってきおる……」

お紺　「んふふ……もっともっと、味あわせてもらっても、よいよな……？」

お紺　「れろっ、ちゅっ……んちゅ、ちゅっ……れる、れろ……んふぁ……ん……れるる……ん、れるぅ、れろ、れろ……」

お紺　「はぁぁ……舐めれば舐めるほど、味が強くなっていって……わしの頭を、支配されてしまうよう、じゃ……」

お紺　「ん？　ふふ……先端だけではもどかしいか？もっと深くまで、咥えて欲しいか？」

お紺　「ふふん、まだ、まだ……わしもぬしのちんぽが味わいたいゆえのう……まだ舌で、味あわせてもらうぞぉ……」

お紺　「ほらぁ……根本の、方もぉ……」

お紺　「れる、れろぉぉぉ……ん、ちゅっ……」

お紺　「あむ、ん、れる、れろぉ……れる、れる……んふっ、んちゅ、ちゅ、れるぅ……」

お紺　「カリ首の裏の、敏感なところもぉ……しっかりと、舌でこそいでやるから、のぉ……」

お紺　「はむ、れるっ、じゅっ、ちゅっ……んちゅっ、んんぅっ、はっ、ん……ちゅう、んちゅう……」

お紺　「くすっ、ここ……他のところより、一層匂いが濃くて、癖になってしまいそうじゃのう……♪」

お紺「れる、れるっ……じゅるるっ、れろ、れろぉぉ……んむ、んっ、れるる……んぅぅ、れろぉぉぉ……」

お紺「ふふっ、ぬしも、身体を震わせてぇ……やはり、男子はここが敏感、なのじゃなぁ……♪」

お紺「ちゅぷ、んちゅっ……れる、ちゅ……はむ、んっ、ちゅっ、ちゅっ……れるぅ、んっ、れる、んちゅうううう……」

お紺「はぁ、はぁ……ぬしも、もう我慢の限界か？」

お紺「わしも、じゃ……ただ、舐めるだけでなくぅ……ぬしのちんぽ、口に挿れてぇ……」

お紺「じゅぼじゅぼ、って、やらしい音立てながらぁ……たくさん、たくさんシコシコしてあげたくなってしまっておるぅ……」

お紺「ふふっ、お互いの気持ちは、一緒のようじゃ、な……それでは……ふふっ、そろそろ咥えてしまうから、なぁ……はぁ、はぁ……」

お紺「あぁ～ん、んむっ……ちゅ、んぅぅ……かぷっ、んっ、はむぅ……」

お紺「はふ、ん……ふふぅ……ちんぽ、口の中に……入っていくぞぉ……♪」

お紺「ぬしのリンゴのようにぷっくりとした、亀頭がぁ……わしの口の中に、収まってしまうぅ……はぁ、はぁんっ……」

お紺「んん、くぅぅん……わしの、小さな口ではぁ……これだけでも、いっぱいになってしまいそうじゃ……はぁぁ……」

お紺「んふぅっ、くぅんっ……はぁ、んちゅっ、んちゅっ、ちゅう、ちゅっ、ちゅうぅっ……」

お紺「ぬしに、口の中ぁ……犯されていると、感じるだけ、で……背筋が、ゾクゾクと……震えてくるぅ……」

お紺「あああ……もっと、ぬしの濃厚な匂いと、硬いちんぽにぃ……口の中、犯して欲しい、のじゃっ、ああっ、んぅぅ……！」

お紺「ん、あむ、ちゅぶっ……んじゅるっ、じゅるる……ちゅっ、んぷ、ちゅっ、んぢゅっ、ぷぁぁ、んちゅっ、ちゅっ、んぢゅるっ……」

お紺「ぷぁぁ……ん、はぁ、はぁ……んくぅ、んっ、ふぅ……ふぅ……」

お紺「えへへ、んはぁ……口の中、ぬしの匂いで、いっぱいじゃあ……」

お紺　「くす、わしも、節操なく舐め回しすぎたわ……ロとちんぽの間で、湯気が立ってしまっておるようじゃ……」

お紺　「んぅ、んぅぅ……あの、あのな……ぬしぃ……」

お紺　「今は、童女の姿ゆえ、どのくらい深く咥えられるか、分からぬが……」

お紺　「もっと……ぬしのちんぽ……わしの口の中で、味わってしまっても……構わんか……？」

お紺　「この姿ではあるから、ぬしをちゃんと気持ちよく出来るか、心配ではあるが……」

お紺　「もう、ぬしのちんぽ……欲しくて欲しくて、たまらなくなってしまっておる、のじゃ……」

お紺　「そ、そうか……！　ぬしも、して欲しいと言ってくれるなら……」

お紺　「わしの小さな、童の口でぇ……ちんぽ、精一杯……気持ちよく、してやるからのぉ……♪」

お紺　「はぁ、はぁ……くぅ、ん、ふぅ、ふぅ……それ、では……咥えてしまうぞ……」

お紺　「ぬしのちんぽぉ……わしの、口の深くまで、突き入れて……しまう、からなぁ……はぁぁ、はぁ、はぁぁ……！」

お紺「ああああん……んむっ……んくっ、んっ、ずぞぞ……」

お紺「じゅぞぞ……じゅるっ、じゅっ、ちゅ……んんぅ……あむぅぅぅ、んむっ、んくっ、んんぅ……！」

お紺「えへ、へへぇ……はい、っひゃ……口の、こんな……深く、までぇ……」

お紺「ん、ん……苦しいが、へいき、じゃ……んん……んく、んぐぅ……」

お紺「このまま……ん、ん……わしの、くひのなかで、いっぱい……しごいて、やるから、んん、んぅぅ……！」

お紺「んんっ、んむっ、じゅるっ、んじゅるっ……じゅぞぞっ、んじゅっ、ちゅっ、ちゅぶぶっ……」

お紺「ひぅ、あっ……おっき……口の中、全部ぅ……ちんぽで、いっぱいになっておるぅ……」

お紺「んむっ、じゅるっ、じゅるるっ、んじゅっ、ちゅっ、んんぅっ、んくっ、んれるっ、んちゅうっ！」

お紺「もっと……はぁ、もっとぉ……ぬしの味で、口の中っ、満たして欲しいっ、欲しい、欲しいのじゃあっ……！」

お紺「れるっ、んじゅっ、んむ、んっ、ぢゅっ、ちゅっ……ちゅぶぶっ、はむ、ちゅるっ……んっ、ぢゅうう、んぢゅうううっ……！」

お紺「はひっ、んっ……くぅぅ、んむっ……喉、までぇ……ちんぽで突かれてぇ……んひぃ、んっ、ふぅぅ……！」

お紺「苦しい、くらい……なのにっ、はぁぁっ……！気持ちよいのが、止まらぬっ、はっ、はっ……！」

お紺「こんな下品な、顔なぞぉ……誰にも、見せたことが、ないのに……んんぅっ……！」

お紺「ちんぽ咥えてっ……メスの顔にっ、なってしまっておるっ、メスに、なってしまうぅっ……！」

お紺「ぢゅううっ、んぢゅっ、ぢゅるるっ、んむっ、ぢゅっ、ちゅっ！　ちゅううっ、ぢゅるるっ！」

お紺「ちゅっ、ちゅっ！　んじゅるっ、ぢゅるるっ！ぢゅう～～～～っ！　ぢゅっ、ちゅっ！　ちゅううっ！　ちゅぶぶっ！」

お紺「んんうっ！　んぢゅっ、ぢゅうううっ、ぢゅうううううっ！　じゅっ、ちゅっ、ちゅうううっ、んぢゅうううう～～～～っ！」

お紺「ふぶぅっ！？　んんんんぅっ！？　んぐっ、ん～～～～っ！　んっ、んっ、くふぅぅぅぅぅんっ！」

お紺「んじゅるっ、ごくっ、ごくっ、んれるっ、じゅっ、ちゅうううっ、ひぐっ、ひあっ、はっ、あっ！　はひぃ、ひぃぃんっ！」

お紺「んむ……ちゅ、ちゅ……ぢゅ、ちゅうううう……れるる、こく、こくん……ちゅう、んむ……ちゅ、ちゅ……」

お紺「あひ、ひうう……まだ、出ておるぅ……けふっ、んっ、んぅぅ……口の中、収まらぬくらい……せーえき、たくさん……くぅぅ……」

お紺「んぐっ、はうっ、ひう、ん、飲みきれ、な……んぐっ……ん、ぢゅるる、んぶっ、ぢゅう、んぢゅうぅぅ……」

お紺「んんっ！　んっ、くっ……あうううっ……ぷぁぁぁっ……！　はっ、はっ、ひぅ、く、あ……あうう、ふぁああん……」

お紺「はっ……はっ……んひっ、あっ、あっ……くぁぁ……はぁ、ああん……あっ、あっ……あああ……はぁ、あうう、ん、くうう……！」

お紺　「ふ、ふふ……口に、出された……だけ……なのに……はぁ、はぁぁ……気持ちよいのが、止まらぬっ、はっ、はっ……」

お紺　「うう、ひう、ん……はぁぁ……これでは、まるでぇ……」

お紺　「わしが、口だけでイッてしまう、淫乱……みたいでは、ないかぁ……」

お紺　「……む、事実、と言われたら……そうなのじゃがぁ……くぅぅ……」

お紺　「ぬしのちんぽと、精液がぁ……あまりにも美味すぎるのが、悪いのじゃっ……わしが淫乱な訳では、ないのじゃあ……」

お紺　「はぁ……はぁ……で、でもぉ……ぬしはまだ、満足して……おらぬ……よな？」

お紺　「ちんぽもまだ、大きなまま、だし……その、えっと……」

お紺　「男というのは、口でするだけでは、その……満足、せぬのだろう……？」

お紺　「ぬしは、恩人でもあるし……その……収まりがつかなくさせたわしにも、責任はあるし、えっと、じゃのう……」

お紺　「どうしても、というのであれば……続きも……うう……ま、まぐわいも……してやっても、構わぬぞ……？」

お紺　「べ、別にわしがしたい訳ではないからのっ！　勘違いするでないぞっ！」

お紺　「そ、そうか……したい、と申すか……し、仕方ないのう！　ほれ、そのまま横になっておれ！」

お紺　「ぬしが満足するまで、た～っぷりと恩返し……してやるから……のぅ……♪」

★トラック５：「恩返し獣えっち」

お紺　「はぁ……はぁ……こうしてぬしに跨ると、ちんぽの大きさが際立つようじゃな……」

お紺　「ほれ、見てみい……ぬしのモノが中に入ったら……これは、へその辺りまで届いてしまいそうじゃな、くふふ……」

お紺　「くすっ、ぬしもこの小さな身体に挿れることに、興奮しておるのか？　まだ大きくなっていくようじゃぞ……」

お紺　「普通の女子なら耐えられぬかも知れぬ、がの……わしはあやかしゆえな……」

お紺　「ぬしの好きなように、わしの小さなまんこをぉ……好きなだけ、味わってよいのじゃぞ……」

お紺「はーっ……はーっ……わしも、興奮してくるわ……」

お紺「この小さな身体を、ちんぽでズンズンと突かれたら、どれほど気持ちがよいことか……とな……♪」

お紺「……う、やっぱり淫乱、じゃと……うう……反論は出来ぬ、が……」

お紺「ぬしは、好きじゃろう？　こんな、淫乱な童女が♪」

お紺「んっ……ふふ、ちんぽが跳ねて返事をしおったわ。なに、ここは深山（みやま）ゆえな……」

お紺「現し世（うつしよ）を忘れて、童女の身体を好き勝手に貪（むさぼ）っても、誰も咎（とが）めんわい……」

お紺「ふふ、あまり焦らしても……わしが、もう我慢出来そうにないわ……そろそろ……挿れてしまっても、よい、じゃろうか……？」

お紺「うむ、ぬしももう我慢出来ぬようじゃの……それでは、挿れてしまうぞ……♪」

お紺「くぅぅ……んっ、ふぅぅ……はぁっ、はぁっ……んんっ、くっ……あああっ、あっ……はぁ、はぁぁっ、あああんっ！」

お紺　「あっ、あっ……ぬしの、ちんぽでぇ……わしのまんこ、スジまんこぉ……広がってゆくぞぉ……」

お紺　「狐娘の初物まんこぉ……メリメリってぇ……開いてしまうぅ……んぐぅっ、あっ、はぁぁ、あああんっ！」

お紺　「ふぅっ、あっ……はっ……んぅ、ん……はぁ、はぁ……」

お紺　「えへ……中程まで、入ってしまった、なぁ……」

お紺　「ふふっ、見下ろすと……恐ろしいくらい大きく……まんこが広がってしまっておるわ……」

お紺　「ほれ、もっと見るがよい……今当たっているのが、わしの初物の証じゃあ……」

お紺　「ぷつぷつ、とちんぽに感触が伝わっておるじゃろう……？」

お紺　「もう少し、腰を落としてしまえば……」

お紺　「長い時を生きた、狐娘のまんこをぉ……ぬしが、奪ってしまうことになるのじゃよ……♪」

お紺　「わしを助けてくれた上に、口でイカせてくれた礼じゃ……」

お紺　「わしの全て、ぬしに受け取って欲しいと、思ってしまっておるぅ……」

お紺　「えっちしたいだけだろう、と……む、むぅ……そう言われては、返す言葉もないがぁ……」

お紺　「うーっ、そうじゃっ！　わ、わしは……ちょっと優しくされただけのぬしに、身体を許してしまうチョロ狐じゃっ……」

お紺　「認める、認めるからぁ……わしの処女……奪って欲しいのじゃ……よい、じゃろうか……？」

お紺　「そ、そうかっ……あはっ、そう、よな……ここまで来て、抜くことなど……ぬしにも出来ぬよなっ♪」

お紺　「うむ……それでは……もっと腰を、下ろすから、の……わしの身体……存分に、味わうのじゃぞ……？」

お紺　「ふぅ、んぅぅっ……！　くぅっ、あっ、あっ……はぁぁ、あっ、ひぐ、んっ……くぅぅ、あっ、ああ……！」

お紺　「えへへ……ぬしのちんぽ……どんどん、根本まで入っていくぞ……」

お紺　「んんっ、はっ、はっ……わしの、初めてのまぐわいぃ……ぬしに、捧げてしまっておるぅ……」

お紺「ふぅ、ん、ふっ、ふっ……キツいまんこの中にぃ……ぬしのがっ、どんどん、深くぅ……ひぅ、ん、ふっ……！」

お紺「えへへぇ……薄い腹の中で、ちんぽギチギチに咥え込んでいるのが、外からでも分かってしまうなぁ……」

お紺「痛くないか、じゃと……ふふっ、人の子とは身体の力が違うゆえな、これくらい、全然平気、じゃよ……」

お紺「それよりもぉ……はぁぁ……早く、中を掻き混ぜて、欲しくてぇ……胸が高鳴るのが、止まらぬのじゃ……」

お紺「動いても、よいか……？　ちんぽでぇ……腹の中、ぐちょぐちょに掻き混ぜても、よいか……？」

お紺「ふふっ、ぬしももう、まんこで締められて、我慢が出来ぬようじゃの……よいぞ♪　たくさん、動いてやるからの……♪」

お紺「んっ、はっ、はぁっ、んくっ、んっ、んっ！　くぅんっ、んっ、ああんっ！」

お紺「まぐわい、だなんて……初めて、なのに……もう、気持ちよくなってしもうておるぅっ……！」

お紺　「ああっ、ああんっ……そんな、いやらしい、だなんてぇ……！」

お紺　「仕方が、ないのじゃあっ……ぬしのちんぽ、よすぎてっ……！　身体が、勝手にっ……求めて、しまうからぁっ！」

お紺　「むぅっ、ぬし、だってぇ……こんな小さな女子に腰を振られて、興奮している、変態ではないかぁ……」

お紺　「ほれ、ほれ♪　チビまんこもっと締め付けて、絞ってやるから、のうっ……♪」

お紺　「はっ、あっ……くぅ、んふっ……ひあ、ああ……あっ、あっ……はぁんっ、んくぅ……！」

お紺　「ああっ、ちんぽ気持ちいのじゃっ、まぐわいっ、まぐわい気持ちいいっ！　まんこ突かれるの、気持ちいいのじゃあっ……！」

お紺　「う、く……中、だけでこれだけ……気持ちいいのに……奥、までぇ……責められたらぁ……」

お紺　「考えるだけで、怖いくらい……絶対に、気持ちよくなってしまう、のじゃっ……はぁっ、んっ……んぅっ、くぅぅ……」

お紺　「ぬしは……味わいたい、と……思うか……？　わしの一番奥、突き当りのところぉ……」

お紺「ちんぽでガンガン、って突きたい、ってぇ……思ってしまう、かぁ……？」

お紺「くぅぅ……腰が、浮いてきてる……突きたいんじゃな……チビまんこの奥ぅ……」

お紺「勃起しきった大人ちんぽで、こんな子供の身体のまんこぉ……奥まで、全部味わいたいんじゃ、な……はふ、ふぅぅ……！」

お紺「わしも……はぁ、はぁ……このままでは、我慢が、出来ぬっ……」

お紺「なんだか、焦らされているように、感じてしまってぇっ……んっ、んっ……」

お紺「ぬしになら、乱れきった姿を、晒してもよい……」

お紺「いや、ぬしにだから、見て欲しい……わしが、我を忘れて、ちんぽのことしか、考えられなく、なってるとこぉ……！」

お紺「でもっ、はっ、はっ……一人では、怖い、からぁ……ぬしも、突いて……下から、好きなだけぇ……！」

お紺「うむっ、うんっ……では、一緒に、動いて……奥、たくさん……いじめて、欲しいっ、だから、早く、動いて、動いてぇっ……」

お紺　「んひぃいんっ！　あっ、あっ！　だめ、これっ、だめなのじゃっ、ああっ！」

お紺　「こんなっ、あっ、すごすぎてっ……こわれるっ、ああんっ！　おかしくなってっ、しまいそうじゃっ、ぬしっ、ぬしぃ……！」

お紺　「あんっ、んっ！　もう、身体にっ、力っ、入らなっ……すま、ぬっ……ああっ、ひあああんっ！」

お紺　「こうしてっ、ぬしにすがっておらぬ、とっ……！　身体も、心もっ、バラバラにっ、なってしまいそうでっ……！」

お紺　「なのにっ、止まらぬっ！　苦しいのにぃっ！　腰が、止まらなくてっ……！」

お紺　「ああっ、あっ、はぁんっ！　んくぅんっ！　気持ちいいのがっ、大きくなりすぎてぇっ！　おかしくなりそう、なのじゃあっ……！」

お紺　「んきゅっ！　あっ、あっ！　密着する、とっ！　余計っ、ちんぽが奥にっ、当たってっ……！」

お紺　「だめぇ……だめなのじゃあっ……！　これ、こんなのっ、知らないのじゃっ……」

お紺　「怖いのにっ、気持ちよすぎてっ、怖いのにぃっ！　身体、止まらなくてっ……！」

お紺　「本当にっ、どうにかなってしまうのじゃっ……気持ちよすぎてっ、おかしくなってしまうのじゃあっ！」

お紺　「ひうっ、んっ、あっ！　ああんっ！　ひあっ、あっ！　はあああっ！　くああっ、あっ、あっ、あっ！　ひいいいいんっ！」

お紺　「んひっ、んっ、あっ、あっ！　腰っ、とまらなっ……んぐっ、くううんっ！　んやっ、きゃあああんっ、んっ、あっ、はぁぁっ、ああああっ！」

お紺　「ぬしもっ、もっと……動いて、平気だからっ！　ああっ、ひゃっ、きゃうううっ、んくっ、んあっ、はっ、あっ、ああああっ、ああああああっ！」

お紺　「んぐっ、んくうううううっ、ひあっ、んうっ、んあっ、あっ、あっ、あっ、あっ！　はひいいいんっ、んきゅ、くぅぅぅんっ！」

お紺　「もっ、だめっ、だめじゃっ、きちゃうっ、まんこっ、よすぎてぇっ！　ダメになるっ、まんこっ、ダメになるぅっ！」

お紺　「あああっ！　ちんぽビクビク震えてぇっ！　射精しようとっ、してるっ！　チビまんこにっ、せーえきだされるぅっ！」

お紺　「出してっ、イカせてっ、欲しいのじゃっ！　射精でっ、まんこイカせてっ！」

お紺　「わしのっ、初めての絶頂っ！　まんこに精液出しながらっ、中出し絶頂させてっ、欲しい、のじゃあっ！」

お紺　「あっ、あっ、も、だめっ、くっ、きちゃうっ、イッちゃうっ、まんこイクっ！」

お紺　「イキまんこに射精してっ、イカせて欲しいのじゃあっ、はぁっ、あっ、あっ、あっ！　くあああああっ、ひゃうううううんっ！」

お紺　「くあっ、はっ、あああああんっ！　んひっ、んあっ、はっ、あっ！　あああああんっ！　あんっ、あっ、あああああっ！」

お紺　「出てっ、んくっ！　出てっ、出てるっ、まんこにっ、ビュルビュル、ってぇっ！　おひっ、いっ、いあっ、あっ、はぁぁんっ！」

お紺　「だめっ、これっ、ほんとっ……おかしく、なってしまうぅっ！　せーえきっ、出される、とっ、あああっ！」

お紺　「あたまっ、真っ白になってっ！　んぐっ、くあっ！　飛ぶっ、あたまっ、飛んじゃうっ、これっ、ああああっ、これぇっ！」

お紺　「んあああああああっ！　んひっ、んっ！　くうううううううううんっ！」

お紺　「ひあーっ！　あっ！　あああっ！　はぁっ、くああああっ！　はーっ……あ……は……へ、う……うああ……あ、ああああ……」

お紺　「ひっ、ひっ……ん……くうう、んくっ……んううう……うっ、あ……ああ……あ……あ、あ……」

お紺　「は……あ……これ……すご……まんこに、射精されると……こんなにも、気持ちよく……なってしまう、のかぁ……」

お紺　「あるいは……相手が、ぬし……だったから、かも……知れぬ、のぉ……」

お紺　「ふふ、ふ……童女に興奮する変態、じゃがぁ……身体の相性が、抜群、なのかも知れぬなぁ……」

お紺　「ん……精液、溢れてしまっておるのじゃ……もう……こんなに出しおって……」

お紺　「そんなに、わしのまんこの中が、気持ちよかったのか？　ふふっ……それなら、お互い様じゃの……」

お紺　「ふふっ、こんな状況で言うのも、浅ましいと思うかも知れぬが……」

お紺　「わしは、その……ぬしのことを、好いているからこそ……ここまで、乱れたのかも知れんな……」

お紺　「う、うーっ……今のはたわ言じゃ……気、気にするでないぞ……」

お紺　「だが……ぬしとの一夜……とてもよいものであった、ぞ……」

お紺　「ありが、とう……」

★トラック６：「永久の誓い」

お紺　「おはよう、ぬし。よく眠っておったな」

お紺　「はは……それも、あれだけ汗をかいたのだから、当然のことかの……」

お紺　「さて、人の子はいつまでも深山（みやま）などにおるべきではない。下の村まではわしが案内しよう」

お紺　「足？　くすっ、平気じゃ。あやかしの身体は、人の子ほど弱くはないゆえ、な」

お紺　「ぬし……？　なぜ立たぬ？　そうむずがるものではないぞ」

お紺　「わしとて、ぬしと別れるのは辛いと思っておる……」

お紺　「だが、な。人とあやかしは、所詮は別の時間を生きるもの。添い遂げるなどとは、出来ぬ定めなのじゃ……」

お紺　「わしとて、ぬしのことは好いておる……じゃからこそ、昨夜のことは忘れ、二度と合わぬが二人のため……」

お紺　「……そう、悲しそうな顔をするでない……そんな顔をされたら、わしまで……」

お紺　「っ……ぬし、何を……」

お紺　「わしのことを、好き……と……？　種族など、関係ない……？」

お紺　「ふふ……そんな人間が現れるなど……本当に長生きはしてみるものじゃな……」

お紺　「ぬし……わしもぬしを、好いておる……このような気持ち、未だ味わったことがないほどに……」

お紺　「女子にそこまで言ったなら、絶対に……絶対に責任は取るのじゃぞ？」

お紺　「……ふふっ、根拠がない癖に強がりおって……。じゃが、今はぬしの気楽さが頼もしく思えるわ」

お紺　「因習（いんしゅう）なぞ、わしたち二人で塗り替えてしまえば、よいのじゃな……」

お紺　「ふふ、ぬしとなら、出来そうな気がしてくるわい……本当に、不思議じゃ……」

お紺

「これからも、よろしく頼むぞ……主様……♪」